

決断！

中学生道徳1「明日をひらく」(東京書籍社)

骨髓バク移植第一号

絵●相澤るつ子

文●NHK「プロジェクトA」制作班

ひからずの田中さん、生活をすすかりやめた。ついで飲む酒もやめ、またすぐ家に帰った。風邪もひかない気をつけて、けがをしてから出掛けるはらつた。道のりへり歩いた。

一人は、いじめられがとうお父さんを感じた。お父さんが大きへ見えた。

「お父さんは、人の役に立つんだ。」

家に帰つて、息子一人に言った。

す。」と答えた。

も当たつたよくな気分だった。田中さんは、すくに「提供しませんでれないかもしれない」と聞いていたのに、なんとか宝くまで出した。登録したばかりは、型が一致する患者さんは一生あるからだ。

「田中さんは、はじめなどのかわからなかった。骨髓バクで登録したといふとされていたのだ。話してもらつた。

職場にひとつせん電話が入った。「あんな血液が適合しまし

やく一人見つかった。岐阜県の大垣市役所に勤める田中重勝さんだった。

録者を探した。

の血管から出血するかもしれない危機的状況だった。スタッフは、必至で白血球の型が一致するドナーデ会に届いた。橋本さんは、体じゅうにあひのあひができていた。血管からの出血がじきに止ったのだ。

そんなに、名古屋市の病院に入院して、登録患者の橋本和浩さんの容態が急変したといつたら知らざられるケースも多かった。

を探し出す作業を始めたが、一致した登録者に意思を確認すると、家族の反対などから判断がめがたつやつだった。

かけても、白血球の型をしらべるための検査に費用がかかるため、資金集められた。一方で、一九八九年(平成元年)には、ドナーデの登録者数が四百人をえた。患者と型が合った人

会員たちは、ドナーデ登録者を募集する活動を始めたが、骨髓移植につい

ば骨髓を移植するに時間がかかるスケジュームである。

医師の森島泰雄さんを中心、アメリカにて開いた「骨髓バンク」を日本での外には、骨髓移植をつけるにとぎた白血病患者はほとんどいなかった

である。そのため、二十二年前までは、ドナーデにわかる家族がいた人以

ん種類が多く、型が合う確率は、兄弟姉妹で四人に一人、それ以外の場合、肉親でもめったに合わないのが多かった。骨髓移植は、ドナーデ(提供者)と患者の白血球の型が合わなければできない。白血球の型はたいへん

かえ、健康な血液を作り出せる方法である。

白血病は、昔は治らない病気といわれていた。しかし、今日では、「骨髓移植」という方法によつて、死の

絵



「これまでの人生で最も大きな出来事は、骨髄移植を受けたことです。自分が何よりも大切に思っていることは、命の大切さです。自分の命を救ってくれた恩人への感謝の気持ちを忘れないでいたく、常に心に留めています。」

橋本さんは、1971年に東京で行われた日本骨髄バンクの全国集会で、橋本さんには多くの人々が来場して、手術を視聴していました。当時の骨髄移植手術はまだ珍しかったことや、手術のリスクに対する理解がまだ十分ではなかったことから、手術を見学する場所で多くの人々が集まっていたのです。

橋本さんは、この手術を視聴する機会を得て、自身の命が危険であることを理解する機会となりました。それは、自身の命が他人の命によって救われる瞬間でした。

「自分の命が他人によって救われる瞬間は、とても感動的でした。自分の命が他人によって救われる瞬間は、とても感動的でした。自分の命が他人によって救われる瞬間は、とても感動的でした。自分の命が他人によって救われる瞬間は、とても感動的でした。」

橋本さんは、骨髄移植後も、毎年定期的に検査を受け、現在も元気な状態です。彼の言葉から、命の大切さを改めて理解する機会が得られました。

「自分自身の命を救ってくれた恩人への感謝の気持ちを忘れないでいたく、常に心に留めています。」

